

薪の備えを思い煩いながら

牧師 山本 護

今年の秋は急勾配で、寒さが一気に転がって来た。教会では何かと集会が増え、ストーブの薪を多めに備えなければ、と心配しているこの頃、冬はもうそこに来ています。材はいろいろな方面からいただいて確保しているものの、薪は割ってから一年以上乾燥させておきたい。ただ「明日のことを思い煩ふな。明日は明日みづから思い煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり(マタイ傳福音書 6 章 34 節)」とイエスも言っておられ



るし、薪も何とかなるでしょう。旧漢字「苦勞」の“勞”が火に関連づけられていることから、遠い祖先も薪集めに四苦八苦していたのかと想像し、冷やりと晴れた空を見上げました。

宮武外骨(1867～1955)によって明治・大正期に発刊され、政治家や金満家を揶揄したために幾度も発禁処分をくらった『滑稽新聞』。この新聞に 26 種の学者から見た人間観がユーモラスに列記されています。たとえば「経済学者曰く 人は借金する動物なり」とか「建築学者曰く 人は便所を有する動物なり」といった調子ですが、火については「人類学者曰く 人は火を使用する動物なり」とあります。「明日の薪を思い煩う」この気分は、自分の経験を超えた太古からの記憶なのか。感覚が歪まぬよう、そうっと受け取りました。

滑稽新聞に取り上げられた学者の中には「宗教学者曰く 人は罪ある動物なり」というのもあり、これは滑稽と言うよりそのものズバリではないか。いや富国強兵と自由民権が凌ぎ合う世にあって、人間の内外で猛威をふるっているおぞましい罪性をサラリと言っているところが、アイロニーを含んだ外骨らしい筆致なのかもしれません。

「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っている(ロマ 6 章 6 節)」。宮武外骨がキリスト学者にまで手を伸ばしたならば、この「罪と十字架」の教えをどのような言葉でバッサリ斜め切りするでしょうか。

学者リストの最後は「俚諺学者曰く 人は見かけによらぬ動物なり」。まことに意味深な結びです。キリスト者も、敬虔な者も、見かけによらない。仏教徒もイスラームも、見かけによらない。神の子イエスも聖者か悪党か、見かけによらない。おっ、いいじゃないか。明日の薪を思い煩うことなく、何よりも今日を丁寧に過ごしましょう。Ω